

上司小剣「森の家」「東京」の画組から見えてくること

——信州大学所蔵石井鶴三関連資料から——

荒井 真理 亜（相愛大学）

はじめに

石井鶴三と親交があった洋画家で、挿絵画家としても活躍した木村莊八は、「石井鶴三の挿絵」¹⁾で、挿絵は「何かの本文 text を illustrate するもの」であり、「Illustration の本意は「明ラカニシた上で説明シ、図解スルと云うたてまえであろう」という。「挿絵道独得の面目」は (a) 絵画の描写表現法と (b) テキストの解釈法が一体になっていることであるとして、さらに (b) について次のように説明している。

a の純粹絵画的なるに比較して云えば、これは稍文学的と云つても間違ひはない、特殊条件で、挿絵が本文を明_レ示_スる_レ為_ニは先ず与えられたるテキストは、紙背まで画者に依つてその文字（文学）を読み徹されなければならない。その意味で画者に必要なる文学、その素養、趣好、教養等々を指すのである。

そして、石井鶴三が「a b の両輪を堅く仕事の中に合致させ」た成功例として木村莊八は『大菩薩峠』の挿絵を挙げている。

美術評論家の匠秀夫も「石井鶴三の挿絵」²⁾で、「鶴三の挿絵が近代挿絵史に一時代を画する傑作として迎えられたのは、当時の挿絵界に比を見ない素描力に基づいていた」と指摘し、「テキスト解釈を

めぐつてはへ中略その性極めて理知的、犀利な質であり、「深刻さ、きびしさ、渋味といった硬派的な表現に、その力量が十分に発揮されることになる」と述べる。

さらに、小林純子は「石井鶴三と挿絵」³⁾で、次のように評している。

挿絵は、一回につき一点であるため、話のどの部分を描くか、これが画家の腕にかかっている。絵の上手い下手とは別に、本文をいかに理解するか、読解力が必要であり、重要なポイントであるのだ。この点においても優れていることが、鶴三挿絵の評価が高い理由の一つである。

このように挿絵画家としての石井鶴三は、絵画の表現力とともに、文学の読解力が注目されていることがわかる。小林は「話のどの部分を描くか、これが画家の腕にかかっている」というが、小説と挿絵の間に画組を置いて考えたとき、また別の様相が浮かび上がる。一般的に、画組（絵組）とは絵を構成すること、絵の構成や絵画の図案をいう。また、書籍などに内容に合わせた絵を組み入れることを意味し、その絵を指すこともある。しかし、挿絵の指示もまた画組（絵組）と呼ばれる。挿絵の指示というと下絵や図案をイメー

ジするが、小説作者が挿絵に描いてほしい場面を文章で説明することもある。つまり、「話のどの部分を描くか」は挿絵画家ではなく、小説作者が指定する場合もあるのである。

本稿で取り上げるのは、後者の画組である。二〇一八年度の調査で、信州大学所蔵石井鶴三関連資料から上司小剣の「森の家」と「東京」第一部〈愛欲篇〉の画組が見つかった。上司小剣が石井鶴三に送ったこれらの資料を手がかりに、画組が示唆する問題を明らかにする。あわせて、同じく二〇一八年度の調査で発見された上司小剣が石井鶴三に宛てた未公開書簡も紹介したい。

一 「森の家」の画組

上司小剣の「森の家」は「婦人公論」に大正八年六月一日（第4巻6号）から翌九年三月一日（第5巻3号）まで、計十五回連載された。その挿絵を石井鶴三が担当している。石井鶴三の挿絵は大正八年六月一日（第4巻6号）から同年十一月一日（第4巻11号）まで毎回一点掲載されている。「森の家」の挿絵のために、上司小剣が石井鶴三に送った画組⁴の一つが、①の書簡である。

① 石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「他作3—389」）

石井様 私も今日「一寸 左傍挿入」旅行します

よろしく御願申上げます。

上司生

『森の家』 糸ぐみ

秋季競馬 三四頭の馬が紅、白

青の鳥打帽に、全じ色の襷をかけ、

必死になつて先きを争ふところ。

御参「参 ミセケチ」考のため、馬見所の見とり図

を裏に、

（馬見所の見とり図）

封筒はない。便箋は一枚で、「十ノ廿松屋製」の二〇×二〇の原稿用紙を使用している。本文はペンで記されている。便箋には日付が記されていないため、この手紙がいつ書かれたのかはわからない。しかし、内容は「森の家」の挿絵に関する連絡である。ここで上司小剣が指示している「糸ぐみ」は「秋季競馬」の場面である。この「糸ぐみ」に基づいて描かれた挿絵は、大正八年九月一日発行の「婦人公論」（第4巻9号）に掲載されている、「森の家」の第四回の挿絵である。実は、信州大学所蔵石井鶴三関係資料には、「森の家」の第三回の挿絵についての画組もある。この第三回の画組が出されたのは大正八年六月二十九日であった⁵。このことから、①の書簡が石井鶴三のもとに送られたのは、大正八年六月二十九日以降から八月までの間だと推測できる。

「森の家」の第四回は、主人公の春太郎が妻子の留守中に新参の下女に恋文の代筆を頼まれ、その数日後、競馬場で女性の死体が発見されるといふ内容である。秋の競馬が終わって蹄の跡が生々しい様子に、春太郎は「此所から競馬を見た折の新らしい記憶」として、次の出来事を思い出す。

其の時、赤い帽子に赤い襷をかけた騎手の馬が、何うした機みか、この下り坂にかゝつた時、足を折つて見事に転んだ。鞍の上から投げ出された騎手は、青い芝生の上に赤い帽子を飛ばして絶息した。馬もひどい怪我をしたと見えてびく／＼大きな身体を動かしてゐるだけであつた。

このむごたらしい目に遭つたものゝあるのを、よそにして、快さゝさうな鬨の聲は、青い帽子を被つた騎手と、其の乗馬との上に浴せられた。

春太郎は、競馬の日に「不幸な人と馬とを見るために——たゞ傍観する為めに——」集まつた人々と、女性の死体を見ようとしてできた人垣が似ていると思うのである。

第四回の挿絵は、春太郎が恋愛相談を受けた下女が行方不明になり、競馬場で自殺者が見つかったという物語の本筋とは直接関係ない、春太郎の回想場面を描いている。しかも、春太郎にとつて強く印象に残っている「悲惨な光景」ではなく、ありふれた競馬の様子が描かれている。そのため、小説本文と挿絵が対応していないように思われる。

①の書簡で上司小剣が指示した「糸ぐみ」には「馬見所の見とり図」が付けられていた。しかし、石井鶴三が描いた挿絵は競馬場の全景ではなく、「三四頭の馬が紅、白／＼青の鳥打帽に、全じ色の襷をかけ、／＼必死になつて先きを争ふところ」がクローズアップされている。モノクロームのため、紅、白、青であるかはわからないが、騎手は鳥打帽を被り、襷をかけている。馬見所の建物と観客が背景に描かれている。「糸ぐみ」と挿絵を照らし合わせると、石井鶴三

は上司小剣の「糸ぐみ」に従つて挿絵を描いたことがわかる。つまり、物語の展開にふさわしくないように思われる場面を挿絵に指定したのは、上司小剣なのである。

二 「花道」の連絡

上司小剣の「花道」は、「時事新報」の夕刊に大正九年四月五日から九月十一日まで計一六〇回連載された。上司小剣の推薦で、この「花道」の挿絵も石井鶴三が担当した⁶⁾。石井鶴三の挿絵は大正九年四月十二日、七月十二日、七月二十四日以外は毎回掲載されている。

石井鶴三に挿絵を描いてもらうにあたり、上司小剣が「花道」の登場人物に関する説明をしたためたのが、②の書簡である。書簡には今日の人権意識からすると不適切な表現もあるが、資料の歴史的価値を考慮し、そのまま紹介する。

② 石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「馬場59—158」）

拝呈。先日は失礼いたしました。

画がまことに結構で、新

聞小説挿絵中比類ない

ものだと、あの新聞社の人も

「大層 左傍挿入」喜んで居りました。篇中の人

物に就きもう少し委しく申し「改ページ」

上げる筈でしたが、前ので大抵よろしいであらうと存じ、重複すると却つて分らなくなつていけないと思ひましたから、態々申し上げないで居ります。所である春子といふ人間が天使と白痴との混合物の如く、一種へんてこ「改ページ」

の人間で、低能と見えたり天才と思はれたり「不明二字 ミセケチ」して活躍しますから、さういふ風にお願ひいたします。笑ふ度、物を言ふ度に歯肉の著しく露はれるのが特徴であります。それからもう少しすると山路一遊といふ「改ページ」

十七歳の少年が「関西から 左傍挿入」出て来ます、これは與三郎（叔父）の甥に当り與三郎の少年時代によく似た「人 ミセケチ」人物で、もう少し旋毛曲りの点があります。書きためてお互ひに旅行したいのですが、どうも思ふやうに行きません。二三日中に「改ページ」

三四回書き溜めて、大阪まで行くつてまゐります。朝鮮「は ミセケチ」「は 左傍挿入」だんく

暑くなりますので、九月に延ばしました。
何分よろしく御願ひ申し上げます。

五月二十日 上司生
石井様

毎朝画を見るのを楽しんで起きます。

封書の宛先は「市外。田端二八二。／石井鶴三様」である。消印はインクがかすれて読めない部分がある。日付は五月二十日、時間は午後二時から三時とわかるものの、年や地名はわからない。差出人は「東京、下目黒四二二／上司小剣」（朱印）である。封筒裏には上司小剣によつて「五月二十日」を記されている。便箋は五枚で、東京社特製「上司用箋」を用いている。ペン書きである。

新聞連載中の小説に出てくる登場人物について知らせた手紙であるが、「春子」、関西から出てくる十七歳の少年「山路一遊」、叔父の「與三郎」という名前が挙がっている、この小説は「花道」である。「花道」の連載は大正九年なので、②の書簡が出されたのは大正九年五月二十日と断定してよい。

先の「森の家」に挿絵を入れるにあたり、上司小剣は石井鶴三に会見を申し込まれ、登場人物の性格や、作品の奥にある思想、背景に用いられる土地などを詳しく聞かれたという。その時の経験から、上司小剣は「花道」の登場人物について石井鶴三に連絡したのであろう。②の書簡に「前ので大抵よろしいであらうと存じ、重複／すると却つて分らなくなつていけないと思ひましたから、態々申す

し上げないで居ります」とあるので、これ以前にも同様の説明をしていたことがわかる。上司小剣は、②の書簡で特に主人公の春子は愚かにも賢くも見えるように描いてほしいと希望している。さらに「笑ふ度、物を言ふ度／＼に歯肉の著しく露はれるの／＼が特徴であります」と伝えているが、「花道」の挿絵に春子が歯茎を見せて笑ったり、しゃべったりしている様子は描かれていない。登場人物の描き方は石井鶴三に任かされていたのだと思われる。

三 「東京」の画組

「鶴三の挿絵家としての力量が充分に發揮された最初」とされている上司小剣の「東京」第一部〈愛欲篇〉は「東京朝日新聞」に大正十年二月二十日から七月九日まで計一四〇回連載された。石井鶴三の挿絵は五月三十一日と七月五日以外は毎回掲載されており、計一三八点ある。その第八七回から第一〇二回までの画組が、次の③④⑤の書簡である。

③ 石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「馬場59—173A」）

一週間ばかり旅行いたしますから、又々絵ぐみでお願い申し上げます。お書き下さるのに御都合がわるいとは存じますが何卒あしからず、こんなには長くなるまいと思ひますが、念のため九回分よろしく。

石井様

上司生

『東京』 87 88 89 90 91 92 93 94 95 画ぐみ

花の上野 十

濱江と春田とが、小夜子の新宅の茶の間（花の上野九に出たところ）で天井か垂れ下がった電燈「素人が仮りに点火した大きな「一字不明 ミセケチ」球」左傍挿入」を見上げながら隅の方に坐る。（夜）「八時頃 左傍挿入」

花の上野 十一

小夜子と同じ茶の間へ籐の安楽椅子を持ち出して来て腰をかける。（夜）「全上 左傍挿入」

花の上野 十二

濱江と経子（普通の束髪）と春田の三人が不忍

池の畔「弁天の方へ渡るあたり 右傍挿入」に来かゝる。（夜）

「青 ミセケチ」「若 左傍挿入」葉の清水谷 一

弁慶橋の上を春田と濱江とが渡る（「快晴の五月 左傍挿入」午後一時）

若葉の清水谷 二

清水谷公園大久保「遭難 ミセケチ」哀悼碑の前に春田と

濱江と並んで立つ。（午後一時）

若葉の清水谷 三

清水谷公園に近い或る家の「二字不明 ミセケチ」離座敷。清

楚な平家、泉石の数寄を凝した庭。池あり、

井戸あり、（苔の生えた石の井筒）其の「二字不明 ミセケチ」離座敷

の床の間に「桑の文台を置き 左傍挿入」白木の小匣を飾る。「其の前に 左傍挿入」小夜子が坐る。「改ページ」

経子、春田、吉松、濱江皆集る。(小夜子が其の元の夫から婚約の指輪を取り戻し、指輪の葬式をする処)

〔青 ミセケチ〕〔若 右傍挿入〕葉の清水谷 四

同じ離座敷へ、本郷隆夫(元外交官五十五)

禿頭疎髯の瘦せた小づくりの人が着て、靴を脱ぐ。薄鼠色の背広。(午後三時)

若葉の清水谷 五

大久保公遭難碑の近くへ、春田の指輪の墓

穴を掘る。(午後三時半)

若葉の清水谷 六

元の離座敷へ、伯爵伊達弘邦(四十九)が絹の紋付の羽織に薄セルの袴で来る。小夜子が迎へる。

④石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「馬場59-173B」)

恐れ入りますが、もう五六回系ぐみでお描きを願はなければならなくなりました。取り敢へず四回分お送りします。「この挿入」あと二回ぐらゐで帰京致します。

二十一日 上司生

石井様

『東京』「二字不明 ミセケチ」 96 97 98 99 絵ぐみ

〔青 ミセケチ〕〔若 左傍挿入〕葉の清水谷 七

エミイル・ゾラの未亡人が、亡父の情婦に生れた子

のあるのを、ゾラの死後に発見して、それを愛育したといふことを、指輪の葬式の離座敷で本郷隆夫が話す。ゾラ未亡人の肖像を描いて下すつて「も 左傍挿入」よく、また本郷が感激した様子でそれを話してゐるところでもよろしく。(指輪の小匣は埋めてしまつてもう床の間になし)

〔青 ミセケチ〕〔若 左傍挿入〕葉の清水谷 八

畠山繁造といふ人(初めて出る。本郷隆夫の友人、

力士のやうに肥えた五十男、八字髭、一見好人物、大きな顔で、頬がふくれてゐる)が新橋駅の階段

の下り口で、自分の娘と間違へて、見知らぬ

他家の娘を背後から抱きすくめ、大に詰責され

て詫びてゐる。(これも畠山「二字不明 ミセケチ」がおくれ馳せに、指

輪の葬式「の式場 ミセケチ」へ来ての失敗談中の光景)

〔青 ミセケチ〕〔若 左傍挿入〕葉の清水谷 九

同じ式場で、日本料理の食事。小夜子、本

郷、伊達伯、畠山等よろしく居並ぶ。

若葉の清水谷 十

同じく式場になつた家の数「二字不明 ミセケチ」奇を凝らした庭園で、小夜子と吉松との激論。「改ページ」

⑤石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「馬場59-174」)

『東京』 100 101 102 絵ぐみ

若葉の清水谷 十一

岩村正國（初めて出る人物、小夜子の先夫。三五六。骨張

つた顔、「痩せ形、左傍挿入」薄き八字髭あり。日本服の袷に羽織、
いづれも

編物、新らしい麦稈帽）清水谷哀悼碑のあたりをうろ

くする。指輪を埋めたところを探す処。

若葉の清水谷 十二

清水谷公園の後の高い丘の上に、「一字不明 ミセケチ」春田と経

子とがむつ

まじく話す。

若葉の清水谷 十三

同じ場所へ濱江が怒つた顔をして飛び込む。

（以上いづれも晴れた日の午後三時—四時）

恐れ入りますが、今三回だけ絵ぐみで

願ひ度、おそくも二十八日には帰京い

たします。

大阪にて

上司生

石井様

いづれも封筒がなく、また便箋にも日付がないため、これらの

画組がいつ書かれたものかはわからないが、③の書簡は第八七回が

「東京朝日新聞」に掲載された大正十年五月十七日より前、④の書簡

は第九六回が掲載された五月二十六日より前、⑤の書簡は第一〇〇

回が掲載された五月三十日より前に石井鶴三に渡されたことは間

違いない。③と④は東京文房堂製二〇×二〇の原稿用紙を使用し、
⑤は和紙を用いている。本文はすべてペンで書かれている。

③の書簡を出す前、すなわち大正十年五月十一日に上司小剣は石
井鶴三に手紙を書き、次の連絡をしている。

朝日社の方へ画ぐみを送った方が便利であらうと思ひまして、

今日 84 85 86 三回分の画ぐみを出しました。 87 88 89 の三回は多分

原稿でお描きを願へることゝ思ひます。それから九十二三回ま

で、また絵ぐみでお願ひします。

信州大学所蔵石井鶴三関連資料には、上司小剣が朝日新聞社に

送ったという第八四、八五、八六回の画組もある。¹⁰上司小剣は大正

十一年五月十一日の書簡で第八七、八八、八九回は「多分原稿でお描

きを願へることゝ思ひます」と述べていた。しかし、③の書簡にあ

るように、上司小剣が「一週間ばかり旅行」することになったため、

結局、石井鶴三は第八七、八八、八九回も画組で挿絵を描かなければ

ならなかったようだ。

第八七回から第一〇二回までの画組と新聞に掲載された挿絵を

比較してみると、上司小剣の指示通りに挿絵が描かれていることが

わかる。ただし、大正十年五月三十一日の「東京」〈愛欲篇〉、すな

わち第一〇一回「若葉の清水谷 十二」は小説本文のみで、挿絵が

ない。紙面の都合か、挿絵が間に合わなかったのか、その事情はわ

からない。

一方、翌六月一日、すなわち第一〇二回「若葉の清水谷 十三」

には挿絵がある。石井鶴三は上司小剣の画組に従って、「清水谷公園

の後の高い丘の上」で「春田と経子とがむつまじく話す」「同じ場所

へ濱江が怒つた顔をして飛び込む」場面を描いている。しかし、実際は小説の内容と挿絵が合致していない。小説には、「突然濱江の姿が、二人の背後から現れた。春田と経子とは、岩乗なベンチの上に寄り添ふて腰をかけてゐたのである」とある。だが、挿絵の濱江は春田と経子の背後ではなく、正面から現れているように見える。しかも、挿絵では春田と経子は立ち話をしている風で、ベンチには腰をかけていないのである。小説と挿絵にこのような齟齬が生じた原因は、石井鶴三が小説の原稿を読まずに、画組のみを手がかりに挿絵を描いていたからである。上司小剣の画組での指示が大雑把であったため、石井鶴三は登場人物の様子や位置関係を想像して描くしかなかったであろう。

四 画組の必要

石井鶴三は「東京」の挿絵を描くにあたり、毎回必ず小説の原稿を読んでいたわけではなかったのである。「東京」〈愛欲篇〉の挿絵は時間に余裕がない状況で制作され、新聞に掲載されていたようだ。その様子がわかるのが、⑥の書簡である。

⑥石井鶴三宛差出人不明書簡（仮番号「馬場59—172」）

毎日鬱陶しいお天気で御坐います

扨て今日画稿を頂戴に上りました使ひが午後

一時十分に帰社致しました、実は前々から写真の

製版部が正午過ぎに画稿が来たのでは一日

中で一番忙がしい夕刊の製版とカチ合ふから
絶対に出来ぬと申出てをりますのを宥めたり
頼んだりして今日に及んだのであります、それも何
つもは、正午「過ぎ 左傍挿入」十分か二十分遅くも三十分位であ
りまし

たのが今日は余り遅れましたので一時は挿
画なしと決めたのですが工場のはうを説きつけ四版
か五版頃から入れる事に致しました

所で此状態が長く続きましては工場のはうの
「改ページ」

係員に無理ばかり云ふのでだんく／＼気が荒く
なりますのみか、貴方も御迷惑の事と拝察
致します。就ては一つ上司さんと御懇談下さ

いましてモウ少々原稿に「右傍朱点 余裕の出来ませすま」
「右傍朱点 だ」少しは不完全でも画組で御執筆が願はれ

ますまいか、これは甚だ窮策ですが今回の
場合斯うでもしなければ各方面の苦情が多く
てやり切れません、それに小生も来る十九日頃か
ら二週間ばかり社を休み不馴の人に代理を頼
みますので一層懸念に堪えないので御坐います、
上司さんのほうへは小生からモット原稿を余計に
書いて頂くことをお頼みするだけお頼みして□つ

封筒はなく、便箋が二枚しか残されていない。内容が途中である
ため、この続きの便箋があったはずである。「東京朝日新聞発行所用
箋」を使用し、ペンで書かれている。差出人は不明であるが、内容

から東京朝日新聞の関係者だと推測される。

「東京」は第一部〈愛欲篇〉、第二部〈労働篇〉、第三部〈争闘篇〉、第四部〈建設篇〉からなる長篇小説である。「東京朝日新聞」に発表されたのは、第一部と第三部で、第三部〈争闘篇〉は大正十二年十月一日から十二月二十九日まで計九〇回連載された。石井鶴三の挿絵は毎回必ず掲載され、計九〇点ある。⑥の書簡が第一部〈愛欲篇〉の連載時のものか、第三部〈争闘篇〉の時のものかは判断できない。

しかし、石井鶴三が画組だけを手がかりに挿絵を描かなければならなかった事情は窺える。画稿の到着が遅延するため、写真の製版部や印刷工場からの苦情が絶えないのだという。「一時は挿画なし」で組版して印刷し、挿絵を「四版か五版頃から入れる」こともあったようだ。そのため、⑥の書簡では、上司小剣の原稿に余裕がでるまで「少しは不完全でも画組で御執筆が願われますまいか」と依頼している。上司小剣の執筆が遅いために、すべての作業が遅れていく様子が見える。

五 その他の書簡

石井鶴三は「東京」第一部〈愛欲篇〉の後、上司小剣の「白い蚊帳」の挿絵も描いている。「白い蚊帳」は「週刊朝日」に大正十一年八月十三日から十月十五日まで連載された。「白い蚊帳」に関する連絡状だと思うものが、⑦石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「馬場59-161」）と⑧石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「馬場59-162」）である。どちらも封筒のみで中身はない。

⑦の封筒は書留で送られている。宛先は「東京。市外板橋町中丸二六六／石井鶴三様」である。消印は欠損のため、日付は八月十五日、地名は「板橋」、時間は十二時しかわからない。差出人は「日光中禅寺歌ヶ濱米屋旅館方／電話（中宮祠）一番／上司小剣」である。上司小剣によつて「大正十一年八月十五日」と記されている。宿泊先の封筒を使用したであろう、差出人の住所や電話番号は印刷されており、宛先、署名、日付は墨書である。

⑧の封筒の宛先は「東京府下板橋町字中丸二六六／石井鶴三様」である。消印はない。差出人は「日光中禅寺歌ヶ濱米屋旅館方／電話（中宮祠）一番／上司小剣」である。上司小剣によつて表に『『白い蚊帳』十二、十三』、裏に「大正十一年八月二十四日」と記されている。⑦と同じ封筒を使用しているが、⑧はペンで書かれている。これらの封筒から、上司小剣が大正十一年八月に日光に滞在し、そこで「白い蚊帳」を執筆していたことがわかる。

信州大学所蔵石井鶴三関連資料には、ほかに石井鶴三に宛てた上司小剣の書簡がある。⑨の葉書は近況報告である。

⑨石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「馬場59-171」）

お正月からこちらへ来てみます。暖かです。一両日中に帰京いたします。

一月十二日

この絵葉書の宛先は「東京市外／板橋（池袋）／中丸二六六／石

井鶴三様」である。消印はインクがかすれて読めない部分がある。日付は一月十二日、時間は一時から二時とわかるものの、年や地名はわからない。差出人は「大阪道頓堀戎橋北／前川旅館／上司小剣」である。ペン書きである。裏面は「中央公会堂と図書館(大阪名所)」の写真である。

次の⑩の書簡も仕事の依頼であろう。

⑩石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「馬場59-175」)

またく、よろしく
お願ひいたします。

七月二十七日

上司小剣

石井様

封筒はない。便箋は一枚で、二〇×二〇字の原稿用紙を使用している。本文はペン書きである。「七月二十七日」と記されているが、年は不明である。そのため、「またく、よろしくお願ひいたします」とあるが、連載小説の挿絵を依頼しているのか、単行本の挿絵や装幀について頼んでいるのか、詳しいことはわからない。

おわりに

挿絵の制作では、画家が小説の原稿を読み、挿絵に描く場面や構図を決めて、絵を描くケースもあったようだ。日本画家で挿絵も描

いていた中村岳陵は「挿画制作の妙諦^①」で、次のように述べている。

私は挿画を描く時には、先づ描くべき場面を四五回も読み直して、腹の中に十分に其場面を呑み込み、そして其場面中の最も興味を集中すべき箇所を定めてから、構図に着手する。一応本文を読んで合点の行かぬ時は、納得出来るまでも何遍でも読み返し、納得のいつた上でなければ決して筆は下さない。

この場合、画家は挿絵の場面や構図を考えるにあたり、何度も小説を読み返し、テキストを解釈しなければならなかったのだろう。挿絵画家には文学の読解力が求められるといわれるのも頷ける。

しかし、上司小剣の「森の家」の場合、挿絵の場面は絵を描く石井鶴三ではなく、小説を書く上司小剣が指定していた。画組と挿絵を照合すると、石井鶴三が上司小剣の指示に従って、挿絵を描いていたことがわかる。さらに、「東京」第一部〈愛欲篇〉では、上司小剣の都合で原稿が遅れるため、石井鶴三は小説の本文が読めず、画組だけで挿絵を描かなければならないこともあったのである。

画組は、小説原稿の中で挿絵に描いてほしい場面を指定するためだけでなく、小説原稿の代わりとしても用いられていた。画組だけで挿絵を描く難しさについて、富永謙太郎は「内あけ話^②」で次のように語っている。

忙しい時には、作品が間に合はず、編輯者が絵ぐみだけをよこして何時までに描かれたしと来る。

ある時、因ごふな四十位の高利貸が云々といふ絵ぐみが来たので、早速、干乾びたやうなやせた憎々しい高利貸を描いて送

つた。その儘、版になつて翌日の新聞に出てしまふ。二三日たつて、其続きの小説の方が来て見ると小説の方では、肥つた高利貸なのである。やせた男が急に二三日で肥る筈もなく全く是には参つた次第であつた。かうした失敗は私のみではなく、多くの挿画家が経験する事である。

富永が「かうした失敗は私のみではなく、多くの挿画家が経験する事である」というように、画家が画組だけをもとに挿絵を描かなければならないという状況はしばしばあつたのであろう。富田千秋も「百科辞典にあらず」¹³⁾の中で、同様の経験談を紹介している。しかし、「かうした失敗」は挿絵画家の所為とはいえない。「東京」第一部〈愛欲篇〉第一〇二回のように、本文の描写と合致していない挿絵が掲載されてしまう原因の一つには、画家が小説の原稿ではなく画組だけを手がかりに挿絵を描かなければならない状況で、その画組の説明が不十分だつたことがある。

「東京」の挿絵について、木村莊八は「石井鶴三の挿絵」¹⁴⁾で次のように評している。

鶴三は曩きに大正十年及び十二年に新聞挿絵としては上司小剣氏の『東京』を描いているけれども、挿絵家としての凡庸でないデビューはこれで充分に果しているにしても、未だa bの両輪を此のテキストの中で『大菩薩峠』程に渾然と合致させたと言ふ迄の効果は挙げていない。その(a)は既に漸く強いものであるが、(b)は平凡以上を出でないものである。

前述のとおり、木村莊八のいう(a)は絵画の描写表現法であり、(b)

はテキストの解釈法である。つまり、「東京」の挿絵は、絵としての完成度は十分だが、石井鶴三のテキスト解釈が「平凡以上を出ないものである」ため、「大菩薩峠」の挿絵に及ばないというのである。しかし、「東京」第一部〈愛欲篇〉についていえば、石井鶴三は毎回小説の原稿を読んでから、挿絵を描いたというわけではない。時には画組だけで挿絵を描くこともあつた。「東京」の挿絵においてaとbが渾然一体となつていないのは、石井鶴三の力量の問題ではないことがわかる。

また、別の見方をすれば、石井鶴三は画組に書かれた簡単な説明だけでその場面を想像し、絵にしていたことである。石井鶴三も「さしえ画家として」¹⁵⁾の中で、「私は子供の時から物語の本など読んでいると、書中の光景が彷彿として眼前に浮んで来たものです。この習慣は私の絵の進歩に伴い影像が漸次に色濃くなつて来ました」と述べている。こうして培われた石井鶴三の豊かな想像力が、画組による挿絵の制作を支えていたのかもしれない。

このように、画組の存在は挿絵や画家の評価を考える上で看過できない問題を示唆している。

注

- (1) 木村莊八「石井鶴三の挿絵」(『アトリエ』昭和9年3月)。引用は『木村莊八全集 第二巻挿絵(一)』昭和57年12月17日発行、講談社)によつた。
- (2) 匠秀夫「石井鶴三の挿絵」(『近代日本の美術と文学』昭和54年11月5日発行、木耳社)。
- (3) 小林純子「石井鶴三と挿絵」(『石井鶴三展——芸道は白刃の上を行くが如

し』平成21年10月10日発行、松本市美術館)。

- (4) 上司小剣「森の家」の画組のうち、拙稿「上司小剣「森の家」「花道」の挿絵と装幀に関して」(『信州大学附属図書館研究』第1号、平成24年3月31日発行)で②石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「高1-28」)と③石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「高1-27」)を、「上司小剣「森の家」と大正期の「婦人公論」(『信州大学附属図書館研究』第7号、平成30年1月31日発行)で石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「雑2-130」)を紹介した。
- (5) 拙稿「上司小剣「森の家」「花道」の挿絵と装幀に関して」(注(4)と同じ)で紹介した②石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「高1-28」)。
- (6) 石井鶴三「上司小剣——心に残る寸語雙語」(『朝日新聞』昭和42年12月19日)。
- (7) 上司小剣「挿絵画家は作家の女房」(『読売新聞』大正10年3月13日)。
- (8) 匠秀夫「石井鶴三と挿絵」(『石井鶴三全集3』昭和61年3月17日、形象社)。
- (9) 拙稿「上司小剣「東京」〈愛欲篇〉の新聞連載の事情」(『信州大学附属図書館研究』第2号、平成25年1月31日発行)で紹介した⑥石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「高1-219」)。
- (10) 拙稿「上司小剣「東京」〈愛欲篇〉の新聞連載の事情」(注(9)と同じ)で紹介した⑦石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「書6-49」)。
- (11) 中村岳陵「挿画制作の妙諦」(「さし糸」昭和10年6月)。引用は『名作挿絵全集 別巻』(平成26年10月20日発行、大空社) によった。
- (12) 富永謙太郎「内あけ話」(「さし糸」昭和10年7月)。引用は『名作挿絵全集 別巻』(注(11)と同じ) によった。
- (13) 富田千秋「百科辞典にあらず」(「さし糸」昭和10年8月)。引用は『名作挿絵全集 別巻』(注(11)と同じ) によった。
- (14) 注(1)と同じ。
- (15) 石井鶴三「さしえ画家として」(『中央美術』大正12年7月)。引用は『石井鶴三全集2』(昭和61年7月18日発行、形象社) によった。

参考文献

- 『石井鶴三全集1』(昭和63年12月21日発行、形象社)
 『石井鶴三全集2』(昭和61年7月18日発行、形象社)
 『石井鶴三全集別巻1』(平成元年3月29日発行、形象社)

*本稿は科学研究費補助金(基盤研究C・課題番号19K00291)による研究成果の一部である。